

授業レポート…清水陽一郎先生（上越教育大学附属中学校）の実践を紹介

「書写の科学」〜行書の筆使いを多角的に分析しよう（三年）



清水先生は、三年生の書写で、生徒自らが能動的に行書の運筆について探究する授業を提案されました。仮説を立て、それを検証、探究しながら行書の特徴と運筆を客観的に分析し、論理的に結びつけていく試みは、指導者の主観や書字の技能によらない科学的なアプローチともいえます。話し合いや発表などの言語活動が盛んに行われ、教室が活性化される書写の授業の様子をレポートします。

清水陽一郎

1970年生まれ。東京学芸大学書道科卒業後、新潟県中学校教諭を経て、上越教育大学大学院で書写指導について研究。現在、上越教育大学附属中学校教諭。全国大学書写書道教育学会会員。上越国語教育連絡協議会書写委員。主な論文に、「中学生を対象とした書きやすく速く書く力を育成する実践的研究—動的学习要素のレベル化およびマルチメディア教材等の効果—」（上越教育大学押木准教授との共同執筆）など。



○題材の目標

- ・行書の特徴を運筆と結びつけてとらえることができる。
- ・行書の運筆を水平面・垂直面から理解し、滑らかに速く書くことができる。

○学習の流れ

- ・本時の目標を知る。

行書の特徴は、どんな筆使いにより表れるか、書きながら考察しよう。

- ・行書「自」の手本を見て、楷書と比較して、水平面・垂直面の両面から運筆の特徴を推測する。
- ・水平面・垂直面から撮影した楷書「自」の運筆の動画を見る。
- ・行書「自」を毛筆で試し書きし、運筆を動画で撮影する。
- ・行書の運筆と書かれた文字の因果関係についてグループで話し合う。
- ・行書の運筆の特徴について動画を利用しながら発表する。

このレポートでは、授業の様子を、清水先生の発問（青字部分）を柱にして再構成しました。

1 行書と楷書、書き方の違いは

みなさんは、これまで六年間、毎年書き初めを続けてきました。どんな文字を書いてきたのか、振り返ってみましょう。

授業は、これまで生徒たちが書いてき

書き初めの書体が
中学校になって変わったね

楷書	行書
旅の情趣 中3	自然讚美 中2
光る白雲 中1	創造の心 小6
希望の春 小5	

▶授業で使用されたシートから

た書き初めを振り返ることから始まった。小学校のお手本から、順番に画面に映し出されていく。生徒たちは、それぞれの文字を思い出しながら、「あの字は、難しかった」「なつかしい。もう一回書いてみたい」と興味をひかれていく。

さて、ここに挙げた書き初めのお手本ですが、小学校と中学校では、どんなところが変わりましたか。

中学校での書き初めが「行書」によるものだというのに気づかせ、楷書と比較させながら、静的な視点でとらえられる行書の特徴として気づいたことを発表させる。

生徒からは「速く書ける文字になった」「画がながっている」「丸い感じ」などの発言が出てきた。

では、そのような行書をうまく書くポイントとは、どんなことでしょうか。行書のよりよい書き方を言葉で説明することが、今日の目標です。

これまで、作品は何度も書いてきてはいるが、今日の授業では、改めて「行書」の運筆の特徴を動的な視点から意識させることがねらいとなる。

手本として教科書に掲載されている文



さまざまな角度から行書の運筆を撮影し、分析する



▲穂先の縦の動きに着目



▲目の位置から



▲俯瞰する位置から



▲穂先の横の動きに着目



本時では、「自」の字に見られる「点画の丸み・連続」に焦点を当て、どういふ運筆で生じるのか動的な視点から探究させる。

「自然」の「自」という文字を楷書と行書で書いたプリントを配布し、まず「書かれた結果」としての行書の特徴を班ごとに話し合わせる。

いろいろな意見が出たところで、教科書「中学書写 二・三年」P8を提示し、「点画の丸み・変化・連続・省略」「筆順の変化」といった特徴を整理し、確認していく。

2 行書の特徴を整理する

■まず、行書と楷書を比較してわかる行書の特徴を整理してみよう。

字は、「書かれた結果」でしかない。どういふ書き方をすれば、そうした「結果」になるのか、筆の動かし方は、たとえうまく書ける人でも、客観的に言葉で伝えることは難しいものだ。

本時の目標は、そうした行書の運筆の特徴を、きちんと言葉で説明できることを念頭に置いて設定されている。

3 運筆をとらえる視点を考える

■実際に行書を書いているときに、どんな視点から見れば書き方の特徴がわかりやすいでしょうか。

教科書P5の「文字を書くときの姿勢」の写真を見ながら、筆の動きを見る角度について考えさせる。生徒たちからは「目の位置から見るのがいい」「真横から見ればわかりやすいかも」「ガラス張りにして、下から見るのはいかがかな」など提案が出される。

今日の探究課題
行書の書き方は楷書とどう違うの？

探究するときに比較対象になる楷書の書き方の動画をこれから見てみよう。

どの角度から見ると楷書と行書の書き方の差がわかりやすい？



▲清水先生による楷書の動画（真上からと横から）

■最初に、先生が書いた楷書の動画を見てもらいます。この動きを参考にしながら、どの角度から見たら、行書の書き方がわかりやすいか、もう一度考えてみましょう。

参考として、楷書を清水先生が書いている動画を投影。カメラの視点は真上からと横からである。それを見て、運筆をとらえる角度や視点をもう一度検証させていく。

この動画は、次時で、同じ角度から撮った清水先生による行書の動画と比較し、運筆の違いを再確認するためにも使われる。

4 動画で「仮説→検証」を繰り返す

■では実際に、行書を書いているところを動画で記録して、それを使って書き方の特徴を説明してもらいます。

班ごとにデジタルカメラを配布し、動画撮影機能を使って十五分間撮影を行う。さまざまな角度から何度も試行錯誤を繰り返して、運筆を説明しやすい角度を探させる。

最初は、参考として示された楷書の動画のように、上と横から撮影する班も多かったが、しだいに書き手の目の位置、紙の手前からなど、さまざまな角度からの撮影も始まっていく。生徒は「もっとゆっくり書いて」「もっと角度を下からにした方がいいよ」などと会話を交わしながら、協働的に探究活動を進めていた。また、撮る位置によって、天地が逆に映ることに気がつき、カメラを逆さまにして撮影するなどの工夫をする班もあった。

撮影したその場ですぐ再生して確認、また新たに撮影するという、「仮説→検証」の繰り返しで簡単にできるのがデジタルカメラの利点である。また、実際に書いた生徒も含め、全員が同じサンプルを見ながら、運筆について客観的に議論



授業を終えて…清水先生に聞く

客観的な書写指導へのアプローチ

—デジタルカメラなどのICT（※1）機器を使った書写の授業は、初めて拝見しました。

書き初めの前など、生徒に字形や字配りなどを考えさせた後、わたしが書いているところを動画にしてプロジェクトで撮影することはありました。しかし、生徒自身がデジタルカメラを使って撮影するというスタイルは初めてでした。

—いつもとは違った授業でしたが、生徒たちの反応はいかがでしたか。

なかなかよかったです。文字を書く係、撮影する係、指示を出す係、観察する係と班の中で役割分担もきちんとできていました。運筆を受身で学習するのではなく、能動的に探究することを目指しましたが、生徒たちは、試行錯誤しながらも生き生きと活動していたと思います。

—授業を振り返って、もっとこうすればよかったところはありませんか。

楷書の動画を示すとき、垂直面・水平面という分析の視点をあつさり示してし

できるという点でも、非常に有効な手段であった。

5 言葉で行書の運筆を説明する

■班ごとに動画を見せながら、行書の書き方の特徴を発表してもらいます。

「楷書では一画ずつ筆を上げて書いていたが、行書では最初の一目目と二画目の間は筆の高さをあまり変えずに流れるように書いている」

「筆を上下させないで一気に書いている」

「筆の動かし方が丸い感じ。楷書の『うろこ』のようなもの（止めの部分）がない」

「流れるように筆を連んでいるのが特徴」

「折り返しはジグザグしていなくて、



▲自分たちで撮影した動画を見ながら、行書の運筆について説明する

まっただんですが、本当は、そこも含めて考えさせればよかったなと思います。しかし、実際には、生徒たちは、実にさまざまな角度から工夫して撮影していました。—ICT機器を活用する授業のメリットはどんなところですか。

現場を見ていますと、みんなが筆を持って指導できる先生ばかりではありません。また、教師が示す範書は一回性のもので、その瞬間だけの指導に終わってしまいます。しかし、たとえば動画を使えば、生徒は再生された運筆を繰り返して確認することができますし、その間に、教師は机間指導をしながら生徒の支援をすることが可能になります。また、書いている様子を上から撮ったものと横から撮ったものを同時に再生し、立体的な見せ方をすることも可能です。学習指導書に付属しているCD-ROMにもポイントがよくわかる動画が収録されています。まずはそれを利用するのが有効ですね。書画カメラ（※2）は、上手な生徒の運筆を大勢の生徒に見せる際などにとて

丸みをもって筆を連んでいる」

このように、垂直面での穂先の軌跡（点画の連続）や、水平面での滑らかな始筆と終筆（点画の丸み）について、生徒たちは多角的に分析することができていた。動きを言葉で説明することは、大人でも難しいことである。しかし、撮影中の試行錯誤の中で、生徒たちは自分なりの言葉づかいで議論をし、その中で出てきた表現を使いながら、運筆の特徴を説明することができていた。

6 次時以降の活動へ

次時では、清水先生が同じ角度から撮影した行書と楷書の動画を比較し、前時で発表した行書の運筆の特徴を再確認する。その上で、それを意識しながら試書を行い、定着を図っていく。

この実践は十一月に行われたが、十二月の書き初めの課題「旅の情趣」の取り組みとの連携を前提としている。冬休み中に、生徒は清水先生のホームページにアップされた今回の動画や、書き初め課題の動画を見ながら練習を進め、作品は休み明けの全校書き初め展覧会で各教室に展示された。

も効果的です。

こうした機器の活用は、書くのが苦手な先生方にとつての書写指導の可能性を広げるものだと思います。

—テーマを「書写の科学」とされていますが、どういう意図が込められているのでしょうか。

いろいろなICT機器を使用する授業のことで誤解されることもあります。テーマが意味する「主」ところは、客観的に書字活動を分析することです。体育や理科の授業とプロセスが似ているんです。つまり、仮説を立て、それを検証、探究しながら技能に結びつけていく授業です。

今回の授業でいえば、「こういう角度で見たら、より鮮明に運筆の特徴がわかるのでは」という仮説を立て、それを実際にビデオ撮影で検証、探究しました。そこで考えたことが書字に生かされていくのです。

わたしは、書写の授業でも、こうした「思考」の部分をより充実させたいと常々考えています。さらに、今回の授業の最後に、生徒たちが自分の言葉で説明したように、言語活動に結びつけていくことも大事にしていきたいですね。

※1 ICT (Information and Communication Technology) コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報コミュニケーション技術。

※2 書画カメラ 書類や立体物の映像をスクリーンなどに投影する装置。